

特別賞（北海道新聞社賞）

## 認め合える社会へ

釧路町立富原中学校 三年 早坂 悠真

僕の親は共働きでした。そのため、小さい頃から祖父母の家にいることが多かったです。祖父母にくっついて歩いていた僕は、暇さえあれば、縫い物や、簡単な料理を教わっていました。そのおかげで、小さい頃から裁縫や料理が好きで得意でした。

小学校の頃の僕は、体が周りの子より小さく力も弱く、裁縫や料理が好きで、手先が器用だったこともあり、同級生からは「女みたい。」や、「えっ、男子なのに裁縫好きなの。」と言われたことがありました。僕はこの言葉を聞いた時、何と返して良いのかわからなくなり深く傷つきました。裁縫や料理は女性がすることであって、男性が好きになるのは変なことなのかと、すごく悩みました。それ以来「裁縫が好き。」や「料理が得意。」ということを隠すようになっていきました。そして、周りの言う「男らしさ。」を意識してしまい、周りからの自分を見る目が怖くなってしまいました。いつしか、自分の本当に好きな物や、得意なことを隠すようになりました。

小学校を卒業し、中学校に進学しました。そこで、友達と話しをしている時に、もう一度勇気を出して本当に好きで、得意なことを話してみました。この時は、またばかにされるのではないかと怖かったです。しかし、「料理が得意とか、かっこいいじゃん。」と、言われとても驚きました。家族以外に認めてもらったのが、初めてでした。この時にいままで「女みたい」と、言われてきたことを話してみました。そして、話しの中で好きなことや得意なことは、人それぞれで気にする必要はないことがわかりました。この時に、いままで周りが言ってきた「男らしさ」や、「女らしさ」というこの「らしさ」が、男女の偏見を生み出しているということに気付きました。この「らしさ」は、誰かが決めたわけでもなく、無意識な差別や思い込みによるものだということがわかりました。

日本では昔から、男は仕事、女は家庭という男女の役割を固定的に捉える意識が社会にはあります。男は仕事、女は家庭という無意識な固定的な捉え方

は、今でも問題になっていると僕は思っています。現在の日本では、男性の方が働いている人数が多いことや、男性より女性の方が賃金が低い傾向にあること、女性の出世するスピードが男性より遅いことなどが、問題となっています。このような男女の固定的な考えがあることで、世界経済フォーラムがまとめた2024年版「ジェンダーギャップ・レポート」の、男女平等の達成率を比べる「ジェンダーギャップ指数ランキング」では、日本は146か国中118位という結果で、世界的にも低く、G7の中では圧倒的最下位です。

昔ながらの理不尽な考えや偏見で、今も小学生の頃の僕のように悩み苦しんでいる人がいるはずです。僕達は「男性」「女性」という性別以前に人間です。人はそれぞれの価値観が違うため、趣味も好きな事や物も一緒ではありません。まずは、個々の存在を大切にし、お互いの人権を尊重し合うことが大切だと思います。

「男だから」「女だから」という無意識な思い込みや決めつけをせず、自分の考えや価値観を他人に押しつけてはいないか、振り返ってみてほしいです。